

中高年の入所型施設への入所決定に関する研究

—— 60 歳以上の男女の入所意思形成に関与する要因 ——

佐藤 俊 昭・村 田 道 彦

I. 緒 言

1. 保健福祉サービスの一つの目標は、「利用者本位」であることが再度強調されている¹⁾。また、介護サービスを利用する人のために、国、都道府県、市町村レベルで、情報の積極的な開示や説明への要請が高まっている。その中で、入所型福祉サービスの施設ケアを受けるに至る、利用者の意思決定には、介護を受け、継続して一連の段階的過程の中で、利用者がどこで生活するのか、どんな介護をどれくらい必要とするのか、そして、誰がその介護を提供するのか、特に、自立が困難になるにつれ、家族に介護を継続してもらえるか否か等の条件のいかんにより、施設に入るか否かについての意志決定を強く求められる²⁾。

入所施設とは、「心身の障害、経済的理由により、居宅で生活のできない人々を入所させ、介護・養護・食事・入浴等の施設サービスを提供する施設」と定義されている³⁾。入所施設は、英国では、「コミュニテイケアの積極的推進の中で施設ケアを地域生活に不可欠なものとして位置づけるインフラストラクチャー化が展望されている」⁴⁾。一方、我が国においては、1998年6月の中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会による「社会福祉基礎構造改革について（中間とりまとめ）」が公表され、その項目として、社会福祉法人、施設整備、地域福祉計画、サービスの質の向上を行い、施設の処遇・運営・問題・機能の社会化が進められている。

施設入所に関する近年の研究によれば、下仲は、「入所後における健康状態に影響を与えること」⁵⁾、安藤は、「転居することは、生活を再編成させることになり、ストレスフルな出来事であること」⁶⁾、中里は、「特養への移動または、地域老人の転居、転居後の移動の諸要因が関連すること」⁷⁾、が示唆されている。

本研究では、福祉サービスを選択する意思決定が利用者の心身におよぼす影響について検討するために、まず利用者が施設に入所する行為に注目した。入所意志の決定にいたるまでの心理的過程には、問題が複雑に絡んでいると思われるが、その意思決定に関わるの諸要因については、未だ十分に明らかにされていない。

入所には、自発的入所と非自発的入所があり、入所の自発性が影響するので⁸⁾、個人にとって必ずしもネガティブな意味をもつとは限らないという議論もある。本研究は、入所することで直面すると予想される問題が入所の意思にどのような影響を与えているのかを検討した。

2. 目的

本説では、入所意思を取り上げ、それに関わる諸要因及び要因間の因果関係の構成を明確にする。

具体的に以下の点を明らかにする。

- ① 入所意思にネガティブに作用する要因を明らかにする。
- ② 情緒的・手段的に個人をサポートする環境を明らかにする。
- ③ 「ネガティブ要因」と「サポート環境」が入所意思の形成に与える影響を明らかにする。

3. 仮説

調査するにあたって、以下の仮説を設定した。

- 1) 「入所意思形成」に、「ネガティブ要因」は負（抑制）の影響を与える。
- 2) 「入所意思形成」に、「情緒・手段的支持環境」は正（促進）の影響を与える。
- 3) 「ネガティブ要因」が高い場合でも、サポート環境のよさは、「入所意思」に結びつくのを促進する。

II. 対象及び方法

1. 分析対象者

1998年3月、仙台市内3区在住60歳以上の男女から層化2段無作為抽出法により選ばれた調査対象者650人に自己記入式留置調査及び個別訪問面接調査を実施した。その調査の回収票の内、323人（49.7%）より有効回答を得た。

2. 調査項目の構成

質問紙の調査内容は、「基本的属性」、「入所意思のネガティブ要因の項目」、「サポート環境に関する項目」とした。

- 1) 基本的属性：年齢、性、配偶者の有無、子どもの有無と人数、家族形態、仕事と希望施設、入所意思の有無等を調べた。
- 2) 本研究では、入所意思のネガティブ要因の測定には、長寿社会調査要覧第1～3部データベース篇・国民意識調査が指定都市で1,500人の男女を対象に行った入所に関わるアンケート調査⁹⁾から、入所したくない理由として使用された項目を改案し、12項目、7段階評定のスケールを設定した。また、サポート環境の測定には、野口(1991)⁹⁾によって開発されたサポート環境（情緒・手段）のスケール8項目、5段階評定を用いた。入所意思は、“入所するのは全く考えていない” “入所したいと思うが具体的に考えていない” “入所先の情報を集めるなど具体的に考えてい

表1 分析対象者の基本的属性及び希望施設、入所意思

項目	カテゴリー	男性 (%)	女性 (%)
1. 性		136	187
2. 年齢	1) 60～64	52 (38.2)	54 (28.9)
	2) 65～69	42 (31.0)	63 (33.7)
	3) 70～74	27 (19.9)	51 (27.2)
	4) 74～79	7 (5.1)	14 (7.5)
	5) 80～	3 (2.2)	5 (2.7)
3. 配偶者	1) 健在	81 (59.6)	102 (54.5)
	2) 離別	38 (27.9)	43 (23.0)
	3) 死別	11 (8.0)	34 (18.2)
	4) その他	6 (4.5)	8 (4.3)
4. 子供	1) 無し	5 (3.7)	7 (3.7)
	2) 1人	62 (45.5)	83 (44.4)
	3) 2人	31 (22.8)	46 (24.6)
	4) 3人	26 (19.1)	29 (15.5)
	5) 4人以上	12 (8.9)	22 (11.8)
5. 家族形態	1) 既婚の息子家族と同居	27 (19.9)	47 (25.1)
	2) 既婚の娘家族と同居	23 (16.9)	43 (23.0)
	3) 未婚の子と同居	10 (7.4)	14 (7.5)
	4) 孫のみと同居	9 (6.6)	7 (3.7)
	5) 老人夫婦のみ	29 (21.4)	36 (19.4)
	6) 1人暮らし	28 (20.6)	35 (18.7)
	7) その他	10 (7.4)	4 (2.1)
6. 希望施設	1) 特別養護老人ホーム又は養護老人ホーム	24 (17.6)	19 (10.1)
	2) 軽費老人ホーム	33 (24.3)	44 (23.5)
	3) ケアハウス	21 (15.5)	17 (9.2)
	4) 民間老人ホーム	11 (8.0)	25 (13.3)
	5) その他	3 (2.2)	16 (8.6)
	6) 特になし	37 (27.2)	66 (35.3)
7. 入所の意思	1) 入所するのは全く考えていない	34 (26.5)	56 (29.9)
	2) 入所したいと思うが具体的に考えていない	64 (47.1)	85 (45.5)
	3) 入所先の情報を集めるなど具体的に考えている	18 (13.2)	26 (13.9)
	4) 入所先の候補の施設を訪問した	10 (7.4)	14 (7.5)
	5) ほぼ具体的に話しが進んでおり半年ほどの間に 入所する予定である	3 (2.2)	6 (3.2)

る”“入所先の候補の施設を訪問した”“ほぼ具体的に話しが進んでおり半年ほどの間に入所する予定である”の5段階で尋ねた。

3. 分析方法と変数の指標

第1に、60歳以上の男女を対象とした場合のネガティブ要因の妥当性を検討した。

まず、因子分析により、各設問項目の因子構造を検討した。因子分析には、主因子法により固有値 1.0 以上の因子を抽出した後、バリマックス法による因子軸の回転を行った。各設問項目の所属先因子の傾向を整理し、それぞれ命名した。

次に、分散分析により、各項目ごとの男女および年齢別の平均値と標準偏差を算出した。この際、男女および年齢間で、各質問項目の変数に統計的な有意がみられるかを併せて検討した。

第2に、尺度の内的整合性をみるために、サポート尺度の8項目をサポート源別に主因子法・バリマックス回転による因子分析を行い、サポート源の1因子構造をみた。さらに、サポート源別因子の負荷量と因子寄与率ならびに α 係数を算出した。

次に、分散分析により、各項目ごとの男女および年齢別の平均値と標準偏差を算出した。この際、男女、年齢間で、各質問項目の変数に統計的な有意がみられるかを併せて検討した。

第3に、先の入所意思を目的変数に、それ以外の変数を説明変数として、重回帰分析（一括投入方式）を行った。

まず、仮説3を検討するために、交互作用成分として関連する2変数の積を算出し、説明変数の変数として投入し、入所意思の説明を試みた。

次に、交互作用を検討するために、2変数のそれぞれにつき、被験者を上位群と下位群に2分し、入所意思の得点の違いを見た。統計解析は SPSS Base 9.0 for windows により行った。

本研究は、以上の手順・方法により分析を行った。

III 結 果

1. 入所意思のネガティブ要因の因子分析結果

ネガティブ要因に関する12項目について主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った結果、固有値1以上の因子が3因子抽出された。因子分析の結果を表1に示す。

第1因子に高い負荷量を示した項目は、「私が、施設に入ると世間体が悪くなるので入所を考えにくい。」、「私が、入所すると家庭・親戚が反対する。」、「私は、入所すると家族と離れるので辛い。」、「私は、施設に入所すると大勢の人と生活することに気がねする。」、「私は、施設に入所すると他人に世話になるので気をつかう。」であった。これらの項目は、被験者と他者との関わりの不安を示唆していることから、「対人不安のネガティブ要因」と命名された。

第2因子に高い負荷量を示した項目は、「私は、財産や蓄えが少ないので入所は困難である。」、「私は、入所すると費用がかかり過ぎる。」、「私は、退職金や年金などの収入が少ないので入所できない。」、「私は、入所するより、居宅サービスを希望している。」であった。いずれも金銭的な負担の不安に関わる要因を示すものとして、「経済的不安のネガティブ要因」と命名された。

第3因子に高い負荷量を示した項目は、「私は、施設に入所すると将来の生活の場がかぎられてくる。」、「私は、施設に入所すると今までと同じ生活ができなくなる。」、「私は、施設に入所する

場所がどのようなところか知らないので入所することが不安である。」であった。いずれも、生活環境への適応の課題に関する要因を示すものとして、「環境的不安のネガティブ要因」と命名された。

命名された各因子の寄与率は、第1因子が29.31%、第2因子14.33%、第3因子10.39%で、合計54.03%であった。

2. 入所意思のネガティブ要因の年齢差および性差の分散分析

表2は、各入所決定におけるネガティブ要因の学年別および年齢別、ネガティブ要因得点を年齢×性の2要因分散分析の結果得られた各主効果のF値と有意水準を示したものである。

年齢の主効果は、経済的不安 ($F=6.2, P<.05$)、環境不安 ($F=8.2, P<.05$) にみられた。性の主効果は対人不安の要因 ($F=7.3, P<.05$) と経済的不安 ($F=13.2, P<.01$) にみられた。

そこで、ネガティブ要因得点につき多重比較 (Tukey HSD) をしたところ、年齢別では、「60～64歳」より「75～79歳」の対人不安の方が有意に高い傾向があった。また、「75～79歳」より「80歳～」の経済的不安の方が高い傾向があった。性別では、女性の方が男性より「経済的不安」、

表2 「入所意思のネガティブ要因」の因子分析

内 容	FAC.1	FAC.2	FAC.3	共通性
f1. 私が、施設に入ると世間体が悪くなるので入所を考えにくい。	.754	.344	-.033	.632
f5. 私が、入所すると家庭・親戚が反対する。	.723	-.133	.212	.765
f6. 私は、入所すると家族と離れるので辛い。	.634	.287	.011	.656
10. 私は、施設に入所すると大勢の人と生活することに気がねする	.523	0.34	.345	.324
11. 私は、施設に入所すると他人に世話になるので気をつかう。	.491	-.004	.232	.532
f2. 私は、財産や蓄えが少ないので入所は困難である。	-.077	.477	.423	.443
f3. 私は、入所すると費用がかかり過ぎる。	-.171	.661	.117	.442
f4. 私は、退職金や年金などの収入が少ないので入所できない。	.332	.512	.334	.632
f7. 私は、入所するより、居宅サービスを希望している。	.334	.532	.156	.423
f8. 私は、施設に入所すると将来の生活の場がかぎられてくる。	.072	-.141	.712	.554
f9. 私は、施設に入所すると今までと同じ生活ができなくなる。	.139	.232	.599	.443
12. 私は、施設に入所する場所がどのようなところか知らないので入所することが不安である。	.333	-.001	.622	.654
寄与	2.41	1.22	1.08	
寄与率 (%)	29.31	14.33	10.39	

注) 冒頭の番号は項目の提示順序を意味する

注) 因子分析は、主成分法により個有値1.0以上の因子を抽出した後、バリマックス方による因子軸の回転を行った。

表2 入所意思のネガティブ要因別年齢差、性差の分散分析

因子名	60～64			65～69			70～74			75～79			80～			分散分析		多重比較
	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体	性差	年齢	
対人不安の要因	29.4 (6.7)	28.3 (6.3)	29/9 (6.5)	31.3 (7.3)	28.5 (7.9)	30.7 (7.4)	26.5 (8.3)	28.1 (8.8)	27.5 (9.0)	29.6 (8.6)	28.3 (8.2)	29.3 (8.4)	30.2 (8.3)	32.4 (8.1)	30.2 (8.6)	1.2	7.3*	60～64< 75～79*
経済的不安要因	24.4 (7.2)	25.1 (6.8)	24.9 (6.9)	27.3 (6.5)	25.3 (6.4)	26.3 (6.4)	24.9 (7.2)	23.2 (5.7)	24.1 (6.2)	27.4 (6.4)	28.0 (6.0)	27.9 (6.3)	28.8 (6.8)	30.3 (7.1)	29.1 (7.0)	6.2*	13.2**	男<女* 75～79<80*
環境不安の要因	26.6 (7.4)	27.8 (7.2)	27.0 (6.9)	26.9 (7.0)	24.2 (7.3)	26.0 (7.0)	30.2 (6.7)	28.4 (7.5)	28.9 (7.7)	31.1 (8.0)	29.3 (7.7)	30.4 (7.9)	29.5 (7.8)	28.3 (8.19)	28.8 (8.1)	8.2*	2.9	男<女*

() SD * $P<.05$ ** $P<.01$

「環境不安」が高い傾向があった。

3. サポート尺度の信頼性

尺度の内的整合性をみるためにサポート環境（情緒・手段）の8項目をまずサポート源別に主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、どのサポート源においても第1因子の寄与率が58%以上という高い値を示しており、本尺度は1因子構造であると思われた。

表3はサポート源別因子の負荷量と因子寄与率ならびに α 係数を示したものである。8項目いずれも0.7以上の負荷量があり、しかも α 係数が0.9以上の高い水準にあったので、尺度は全体として高い内の一貫性を持っている。

4. サポート得点の年齢差・性差

表4は、各サポート源のサポート得点を年齢×性の2要因分散分析の結果得られた各主効果のF値と有意水準を示したものである。家族($F=7.55, P<.05$)と親族($F=5.44, P<.05$)と専門員($F=10.2, P<.001$)における性の主効果がみられた。年齢の主効果は、家族($F=4.66, P<.05$)と専門職員($F=6.2, P<.05$)がみられた。

そこで、サポート得点につき多重比較(Tukey HSD)をしたところ、性別では、女性の方が男性より「家族」、「親族」、「専門員」にサポートを見出していることが高かった。年齢別では、「60～64歳」と「80歳～」の家族サポートの平均を比較すると、「60～64歳」の方が有意に高い傾向があった。また、「65～69歳」と「80歳～」の専門員のサポートでは、「80歳」の方が高い傾向があった。

5. 入所意思に関わる諸要因

入所意思に対するネガティブ要因とサポート環境との関連を検討するために、入所意思を目的変数に、それ以外の変数を説明変数として、重回帰分析（一括投入方式）を行った。その結果を表5に示す。

入所意思には、上記で検討された対人不安、経済不安、環境不安の要因からの負の影響($\beta=-.17, -.15, -.23$)が存在し、入所意思とこれらの尺度との間で仮説1が成立した。次に、入所意思

表3 情緒・手段的サポート項目と各サポート源別因子分析

情緒的サポート	家族	親族	友人・近隣	専門員
1. 心配事や悩み事を聞いていくくれる人はいますか	.774	.762	.792	.799
2. あなたに気を配ったり思いやったりしてくれる人はいますか	.852	.801	.790	.847
3. あなたを元気づけてくれる人はいますか	.847	.893	.798	.877
4. あなたをくつろいだ気分にしてくれる人はいますか	.726	.771	.850	.806
手段的サポート				
5. もし仮に、あなたが病気で数日間寝込んだ時に世話をしてくれ る人はいますか	.804	.874	.780	.757
6. もし仮にまとまったお金が必要になったときに貸してくれる人 はいますか	.819	.775	.778	.840
7. もし仮にあなたが病気で1ヶ月間寝込んだとき世話をしてくれ る人はいますか	.826	.902	.805	.829
8. 留守の時やちょっと用事を頼める人はいますか	.776	.841	.817	.788
個有値	5.32	4.52	5.12	5.77
因子寄与率 (%)	65.3	69.3	58.2	64.8
α 係数	.912	.899	.921	.901

表4 サポート源別サポート得点の年齢差, 性差の分散分析

サポート源	60~64			65~69			70~74			75~79			80~			分散分析		多重比較
	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体	性差	年齢	
家族	23.3 (6.1)	21.2 (6.8)	22.9 (6.5)	22.2 (6.4)	20.3 (6.1)	21.9 (6.2)	21.3 (5.5)	23.3 (5.7)	21.9 (5.7)	22.0 (5.2)	21.9 (5.5)	21.7 (5.3)	23.8 (4.9)	24.8 (5.0)	23.1 (4.9)	7.55*	4.66*	男<女* 80<60~64*
親族	24.5 (6.2)	27.0 (6.1)	25.9 (6.1)	25.7 (5.9)	24.3 (6.2)	24.0 (6.5)	27.4 (6.6)	26.4 (6.4)	26.9 (6.4)	26.3 (5.2)	28.6 (5.7)	27.8 (5.4)	26.5 (6.0)	27.3 (6.4)	27.0 (6.2)	5.44*	2.22	男<女*
友人・近隣	23.5 (5.2)	20.6 (5.5)	21.9 (5.3)	22.5 (5.4)	25.1 (4.9)	23.1 (4.98)	24.9 (4.9)	27.2 (4.6)	25.5 (4.5)	24.3 (5.0)	25.8 (5.4)	24.3 (5.2)	25.6 (5.8)	26.6 (5.7)	25.1 (5.7)	3.10	1.33	
専門員	21.7 (6.5)	22.7 (6.8)	2.11 (6.6)	21.4 (6.3)	18.6 (6.1)	20.3 (6.1)	20.1 (6.4)	23.6 (5.8)	21.7 (6.2)	19.3 (5.5)	19.6 (5.2)	19.8 (5.3)	20.1 (5.0)	23.3 (5.3)	21.6 (5.1)	10.2**	6.2*	男<女* 65~69<80**

() はSD, * $P<.05$, ** $P<.01$

と情緒・手段的サポートとの間では, 情緒サポートからの正の影響 ($\beta=.24$) が存在し, 手段的サポートから正の影響 ($\beta=.08$) が存在し, 仮説2が成立した。

次に, 入所意思のネガティブ要因として, 対人不安, 経済不安, 環境不安と情緒・手段的サポートとの各説明変数の交互作用について, 仮説3を検討するために, 交互作用成分として関連する2変数の積を算出し, それを8番目の変数説明変数として投入し, 入所意思の説明を試みた。各変数の組み合わせのうち, 「対人不安のネガティブ要因と手段的サポート」, 「経済的不安のネガティブ要因と手段的サポート」との R^2 の増分が有意 ($R^2=.51$, $F=17.02$, $P<.01$) ($R^2=.44$, $F=15.01$, $P<.01$) であった。

交互作用を検討するために, 平均値 $\pm 1/2$ SDを基準に, 入所意思に対するネガティブ要因及びサポート要因高位群 (\geq 平均値 $+1/2$ SD) とネガティブ要因及びサポート要因低位群 (\leq 平均値 $-1/2$ SD) に, 被験者を2分し, 入所意思の得点の違いを見た。

表6 重回帰分析の結果

説明変数	β
ネガティブ要因	
対人不安	-.17*
経済不安	-.15*
環境不安	-.23**
サポート環境	
情緒的サポート	.24*
手段的サポート	.08**
属性	
性別	.05*
年齢	-.09

註: **<P.01 *P<.05

下の Figure 1 は、「対人不安の要因」が低いときの「入所意思」の数値は、サポート高位群は 1.63 であり、一方、「対人不安の要因」が高いときの入所意思は 1.57 であった。同じく、「対人不安の要因」が低いときの「入所意思」の数値は、サポート低位群で 1.49 であり、「対人不安の要因」が高いときは、1.31 であった。このことから、ネガティブ要因が高くなるにつれてサポート低位群は、サポート高位群より、入所意思数値が低くなる傾向があった。

また、Figure 2 は「経済的不安要因」が低いときの「入所意思」の数値は、サポート高位群で 1.50 であり、一方、「経済的不安要因」が高いときの入所意思の数値は、1.49 であった。同じく、「経済的不安要因」が低いときの入所意思の数値は、サポート低位群で 1.54 であり「経済的不安要因」が高いときのもので、1.33 であった。このことから、サポート低位群は、ネガティブ要因が高くなるにつれてサポート高位群より、入所意思の数値が低くなる傾向があった。

上記のことから、サポート環境のレベルの違いが入所意思の決め手となって、ネガティブ要因が高まっても高位群は低位群より入所意思数値が下がらないことから、入所意思を抑制することが確認される。よって仮説 3 が成立した。

IV 考 察

I. 入所意思のネガティブ要因およびサポート関連項目の特徴

入所意思のネガティブ要因項目に関しては、「対人不安」、「経済的不安」、「環境不安」の 3 因子が抽出された。この項目に関する年齢別および性別の検討により、「経済的不安」、「環境不安」に年齢の違いがみられ、「対人不安の要因」と「経済的不安」に性の違いがみられた。

さらに、項目得点につき多重比較 (Tukey HSD) により検討したところ、「60～64 歳」と「75～79 歳」の対人不安の比較では、「75～79 歳」の方が高かった。また、「75～79 歳」と「80 歳～」

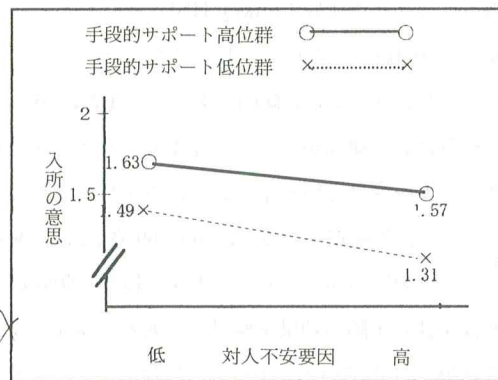


figure 1 : 対人不安の要因が入所意思に与える効果：手段的サポートのレベル別にみた違い

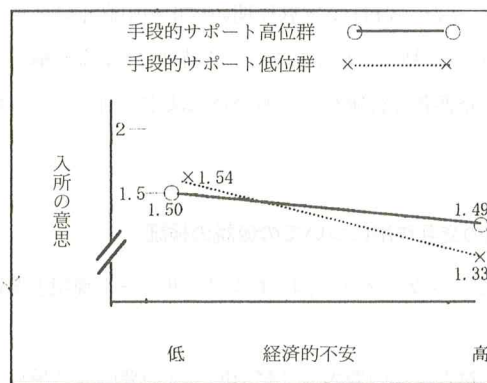


figure 2 : 経済的不安が入所意思に与える効果：手段的サポートのレベル別にみた違い

の経済的不安の比較では、「80歳～」の方が高い。性別では、女性の方が男性より「経済的不安」、「環境不安の要因」により強くネガティブ要因を見出している。

経済的不安のネガティブ要因の性差と年齢差には、個人の収入や財産等が、影響を与えていると考えられる。一般に、女性は、男性よりも収入や財産が少ない傾向があり、加齢にともない金銭面での負担が多くなると思われる。また、環境不安の要因の性差と年齢差には、加齢にともなう適用能力、自立力の低下が影響を与えていると考えられる。実際に、女性や男性の平均寿命の違いや心身の低下の程度によって新しい環境への取り組みに不安やストレスを抱くことは、これでの研究でも述べられてきた⁹⁾。よって、本研究では、女性の方が男性より環境不安の要因が高くなったと考えられる。

サポート環境項目に関しては、各サポート源因子に対して、高い内的一貫性が示された。この関連項目の年齢差および性差では、「家族」、「親族」、「専門員」に性による違いがみられ、「家族」と「専門職員」に年齢による違いがみられた。

さらに、サポート環境得点につき多重比較 (Tukey HSD) をしたところ、性別では、女性の方が男性より「家族」、「親族」、「専門員」からサポートを得ることが高い。年齢別では、「80歳～」より「60～64歳」の家族サポートが有意に高い傾向があった。また、「65～69歳」より「80歳～」の専門員のサポートの方が有意に高い傾向があった。性差でみると女性の方が、男性より「家族」「親族」「専門員」からのサポートを受けている率が高い、つまり、他者からのサポートが男子より強いという結果を示した。また、年齢差でみると、「65～69歳」では、家族からのサポートを期待しているのに対して、「85～」は専門員からのサポートを期待する傾向が高かった。また、河合らは、サポートの授受に及ぼす性と年齢の効果を検討し、老人が高齢になるほどサポートを受領することが多くなるという結果¹¹⁾を得ている。よって、加齢により、サポート源が家庭内から外部へと変化する傾向がある。

高齢者の健康と自立の促進のために、物理的な環境の改善のみならず、心理的にも負担の少ない環境が求められている¹¹⁾。また、岡村は、家族周期の変化が中高年にとってネガティブな心理的影響があること示唆している¹²⁾。特に、入所を決定する時期には、家族構成は過度期的な形態を示していと考えられ、多様な介護者の有無が、入所の意思決定に何らかの影響を与えていると思われる。

2. 入所意思と関連要因の交互作用についての仮説の検証

1) 「入所意思」に対する「ネガティブ要因」および「サポート環境」関連項目の妥当性について

入所意思形成に対して「対人不安の要因」、「経済的不安の要因」、「環境不安の要因」からの負の影響が存在した。よって、「入所意思」とこれらの尺度との間で仮説1が成立した。

対象者は、ネガティブな要因を知覚する結果、入所を決定する行為に消極的にしか取り組めなくなり、結果として行動が抑制されたのだろう。また、「入所意思」と「情緒的・手段的サポート」との間には、正の関係が見出され、仮説の2が成立した。被験者は、他者からの支援が得られることにより、入所決定に関わるさまざまな活動に意欲的に取り組むことが可能になり、その結果として入所意思形成が促進されるのだろう。

2) 「入所意思の尺度」における「ネガティブ要因」と「サポート」関連項目の交互作用について

次に「対人不安の要因」、「経済的不安要因」、「環境不安の要因」と「情緒・手段的サポート」の各説明変数の交互作用についての仮説3を検討するために、直接効果が確認された「サポート内の変数」と「ネガティブ要因内の変数」の高位群と低位群を選び、その交互作用成分と「入所意思」の違いをみた結果、「ネガティブ要因」のうち対人不安の低い群の入所意思は、サポートの程度に関わらず一定であるが、対人不安の高い群の入所意思は、サポートが高いときにより高くな

ることがわかる。

同じく、「経済的不安」が低いときは、「入所意思」はサポートレベルに関係なく一様であるが、ネガティブ要因が強くなると、サポートの良し悪しが入所意思の決め手になり、サポート高位群が低位群より入所意思が高くなり、サポーターとの良好な関係が「入所意思」を促進する効果を持つことが確認された。以上から、仮説3が指示された。

本研究において、ネガティブ要因とサポートとの交互作用の検討から、ネガティブ要因が高い場合、サポートが良好であれば、「入所意思」が促進される結果となった。最近の調査では、施設入所者や居宅生活者の社会的要因の影響性が指摘されたり¹³⁾、心理的に高齢者の負担の少ない環境の整備が自立を促進させることなどが明らかにされていることから¹⁴⁾、環境の整った入所施設に意欲的なものが集まることが予想されよう。

これらの点を踏まえた結果から、今後の課題と展開について記する。

第一に、本研究は、試験的な段階にあり、諸要因の関連も探索的に分析され始められたばかりである。特に本研究の場合は、「入所決定に関わる過程」として、場面を仮定したもので一般化の範囲は極めて限られている。

第二に、諸変数の測定のための方法が確定していないことである。より有効な知見を求得るには、実際の入所行動との関連を見る縦断的な追跡研究の必要がある。しかし、少なくとも積極的なサポートの姿勢が対象者の入所意思形成に影響を与えることが明らかになったことは、今後の介護サービスの施策を進める上で重要であろう。また、多様なサービス供給が進み、利用者のサービスの選択、自己決定が進むなかで、本人の意向の確認とその具体化が求められるであろう。

5. お わ り に

本研究の意義として、入所を志向する行動に関わる変容可能な因子の探索とそれらの働きかけに対する示唆がえられた点では有意義であった。また、多変数量システムの各因子を変数化しやすくすれば、多種の変数との組み合わせが可能であると思われる。いくつかの課題を残し、またその限界も明らかとなったが、今後はこれらの課題に答えるべく研究に取り組む必要があろう。

これらの留意を要する点を踏まえた上で、本研究では、以下の点が明らかにされた。

- ① 入所決定に対するネガティブ要因は、心理的症状と関連を示唆し入所決定の意図に影響するという仮説と一致した。
- ② サポートの要因は、心理的症状と関連を示唆し入所決定の意図に影響を示唆するという仮説と一致した。
- ③ 入所決定におけるネガティブ要因とサポートの要因の交差性は、入所決定の意図に影響を示唆するという仮説と一致した。

謝 辞

本論文は村田の修士論文（東北福祉大学大学院：1998）の考え方を、再調査により検討したものです。白寿生化学研究所仙台支店の職員の方々には、多くのご指導を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。

引 用 文 献

- (1) 京都，東京都の福祉施策研究会の中間のまとめ—福祉施策の新たな展開にむけて—，1997.
- (2) Tobin, S. and Lieberman, MA (1976) Last Home for the Aged. San Francisco, Jossey Bass.
Ridley, N. (1988) The Local Right: Enabling not Providing. London, Center for Policy Studies.
Residential Forum (1996) A standards Guide for Residential Care. London, National Institute for social work.
- (3) 荘村多加志，改正社会福祉用語辞典，1995，中央法規出版株式会社.
- (4) 下仲順子，中里克治（1987） 養護老人ホームにおける施設滞在と老人の心理的適応プロセス，老年社会学 26： 65-75.
下仲順子 [他] (1981) 施設入居と老人の適応 (2)，社会老年学 14： 49-64.
- (5) 安藤孝敏（1994） 地域老人における転居の影響に関する研究，転居後の健康と心理社会的適応を中心に，老年社会学 16： 59-65.
- (6) 中里克治・下仲順子・長谷川和（1980） 老人ホーム入居と老人の適応 (1)，認知機能面を中心に，社会老年学 12： 59-73.
- (7) 安藤孝敏，古谷野亘，矢富直菜ほか（1995） 地域老人における転居と転居後の適応，老年社会科学 (2)： 172-178.
- (8) 安藤孝敏（1994） 地域老人における転居の影響に関する研究の動向，老年社会科学 16(1)： 59-65.
- (9) 財団法人長寿社会開発センター（1990） 都道府県・指定都市版長寿社会調査要覧第1-3.
- (10) 野口祐二（1991） 高齢者のソーシャルサポートその概念と測定，社会老年学 34： 37-47.
- (11) 安藤孝敏（1994） 前掲書.
- (12) 城 佳子，児玉桂子，児玉昌久（1994） 高齢者の居住状況とストレス，老年社会科学 21(1)： 39-47.
- (13) 岡村清子（1983） 中高年女性の生活と老後不安 (2)，社会老年学 17： 21-35.
- (14) 藤野達也（1999） 老人保健施設入所者・通所者及びその家族の特性比較に関する研究；老人保健施設入所要因について，日本社会福祉学会，第41-1号.
- (15) 黒田研一他「都市部の要介護老人における在宅群と入院・入所群の判別分析」日本公衆衛生雑誌，第41巻第1号1994 p. 3-10